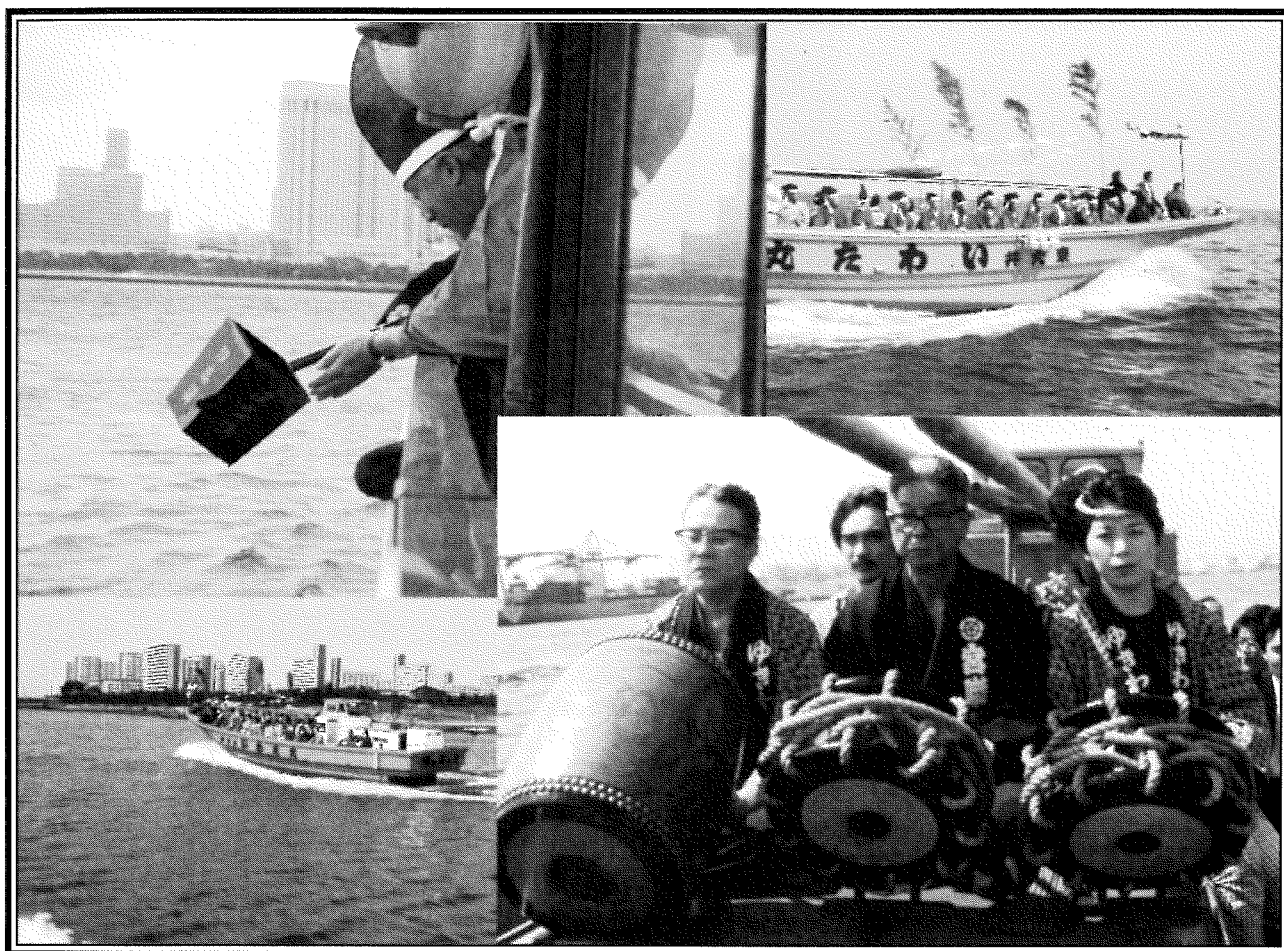


あるむぜお 70

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO.70

2004年12月20日



「潮盛り」の光景 1986年と2002年（左上＝大国魂神社提供）

目次

- 1-2 武蔵国のなかの「くらやみ祭」
- ③品川沖の潮盛り神事
- 3 展示会への招待
- ここまでわかった武蔵国府
- 4-5 ノート 身近な宇宙の大きさを実感しよう！
- 6 民具発見 ⑦再発見のための準備 収蔵庫
- 7 最近の発掘調査
- 上円下方墳から大刀金具が出土
- 8 たまRIVER WARS ⑦SOS玉川上水

くらやみ祭

むさしそうしや おおくにたまじんしや ろくしるぐう

府中市宮町にある武蔵総社・大国魂神社（六所宮）の例大祭。毎年4月30日の品川沖での潮盛り神事に始まり、5月3日、4日の競馬、囃子・万灯・山車の競演と続く。5日夕刻がクライマックスとなる神輿渡御で、6張の太鼓に率いられた8基の神輿が御旅所に入る。神輿は翌早朝に神社に還る。夜中の神輿渡御が特色で、古代武蔵国府の祭の伝統を伝えている可能性が高い。

郷土の森博物館では、10月10日から11月23日まで特別展「武蔵府中 くらやみ祭展」を開催しました。ブックレット5「武蔵府中くらやみ祭」を刊行。1部600円で販売中です。

「くらやみ祭」は品川沖の「潮盛り」で始まります。4月30日の朝、大国魂神社の宮司以下神職と府中の潮盛講のメンバーらは、東京都品川区の荏原神社に向けてマイクロバスで出発。神社参拝後に荏原神社の神職と品川の汐盛講の人たちとともに、かつては近くの目黒川の河口から舟を出しました。今は竹芝桟橋からチャーター船が出航します。羽田空港の沖合いまで行き、そこで海水を汲む神事が「潮盛り」です。正式には「品川海上禊祓式」といいます。一同は柄杓を使い海水で口と手を清め、「くらやみ祭」の神事に用いる潮水を桶に汲んで持ちかえるのです。神輿渡御があるクライマックスの5月5日に先立つ5日前の行事です。

表紙の写真は、1986年当時の舟上での光景と、最近の2002年(左上)の様子。背景に、今や東京ベイエリアの人気スポット、お台場の高層ホテル群が見えています。もっと昔、江戸時代末の『武蔵総社年中行事』によると、日付が少し違って4月25日に、神主以下と神人(神社の所役をする地元の人)が品川 해변に出て禊をするようになっていました。

こうした潮盛り神事をめぐって、今回も設問を考えてみることにします。「くらやみ祭」が潮盛りで始まるのはなぜか。潮盛りはどういう意味を持ち、品川と府中はどのような歴史的な関係にあったか、です。

祭に先だって、祭に携わる人が川や海で体を清めたり、一定期間こもったりすることは、古くから一般的に行われていました。潮盛りもこうした意味を持つ、祭礼の開始を告げる欠かせない行事であることはもちろんです。では、なぜ、府中から約25kmも離れた品川まで行くのか。確かに一番近い海と言えないことはない。しかし海の水でなくてはいけないのか。府中には多摩川も流れているし、崖(ハケ)の湧水も豊富です。実際、神社の東、清水が丘の湧水には末社の御滝神社が祀られ、潮盛りに行けなかった神職は今でもここで禊をすることになっています。

すると、潮盛りは禊をする目的とともに、品川に行くこと自体にも重要な意味があるということになります。荏原神社は品川の総鎮守で、6月の例大祭の天王祭では神輿が海中渡御することでも知られています。また、江戸時代に東海道の宿場町であった品川は、中世には東京湾で最も栄えた湊の一つでした。当時の海上交通は想像以上に盛んだったようですから、品川にはたくさんの物資が荷揚げされ、あるいは品川から多く

の物が積み出されたことでしょう。この品川と、国府の置かれた武蔵国の中心都市・府中を結ぶ流通ルートが存在も考えられます。品川は、武蔵国府の外港(窓口となる港)だとする説もあります。

「くらやみ祭」の起源が、武蔵国府と総社(六所宮)の祭礼で、平安時代後期まで溯り、国内の政治的な支配を固めるための儀式だとすれば、品川沖の潮盛り神事の持つ意義も自ずから明らかになると思います。国府の祭礼で、国内の有力神社の祭神を集結させ祭祀を執り行い関係の強化を図ったのと同様、交通の窓口である品川との連携を再確認し、関係の円滑化を図ろうとする意味もあったのではないのでしょうか。そこまで考えなくとも、ふだんから関わりの深い、交通の便もいい品川をあえて祭の禊の場を選んだということができそうです。

もっとも、問題がないわけではありません。国府との関係、海に近い都市との交通や文化的な繋がりという意味では、少なくとも鎌倉時代までは、品川ではなく浅草(東京都台東区)です。当時の海岸線はこのあたりまで迫り、隅田川を挟んで、浅草・石浜・石津・隅田などの宿や湊が展開していました。下総国との間の古代の官道、鎌倉をめざす源頼朝の進軍ルート、武蔵野合戦の際の坂東道、これらは何れもこの付近と武蔵府中を結んでいます。浅草寺には、六所宮を勧請した社がかつてあり、武蔵国司任官をこの寺に祈願した貴族の話も残されています。浅草こそは武蔵国府の表玄関と言えなくもありません。ずうっと昔「潮盛り」は浅草沖で行われていた、とまでは言いませんが、あるいは、「くらやみ祭」の体裁が整った時代に、浅草に替わって品川との関係がクローズアップされたのかもしれない。



「潮盛り」の桶 (1926年制作)

上円下方墳の 発掘調査

武蔵府中熊野神社古墳

開催中～

2005 年 3 月 13 日(日)



大國魂神社境内の発掘で出土する古代の瓦

ここまでわかった 武蔵国府

2005 年 2 月 5 日(土)～3 月 13 日(日)



発掘調査中の熊野神社古墳

府中は、古代に武蔵国の国府が置かれた伝統のある町です。府中市では、町のルーツである古代国府の解明を目指して、私たちの足元に残る遺跡を発掘してきました。

都市化の進んだ市街地での発掘は、一度の調査で大きな成果をあげることは難しく、長期にわたる綿密な調査の積み重ねが必要です。幸い、市民の皆様の多大な協力を得て、これまでに1200か所以上で発掘調査を実施してきました。

その結果、古代国府に関する豊富な情報を蓄え続けています。中枢となる役所の位置や、役所建設工事の実態、役所を取り巻くマチの姿、人々の営みなど、古代国府の実像が浮かびあがりつつあるのです。

こうした成果は機会ある毎に、さまざまな形で公開に努めてきましたが、本展示会では現在までの調査を総括して、古代国府のマチの全体像を提示したいと思います。

府中市西府町にある熊野神社古墳は、発掘調査によって、全国的にもとても珍しい上円下方墳であることが判明しました。

造られたのは7世紀中頃と推測され、武蔵の南部では当時、最大級の古墳のひとつでした。国府が設置されるのは8世紀初頭頃ですから、熊野神社古墳の存在は、国府設置前夜の地域の情勢を考える上で重要な意味を持ちます。

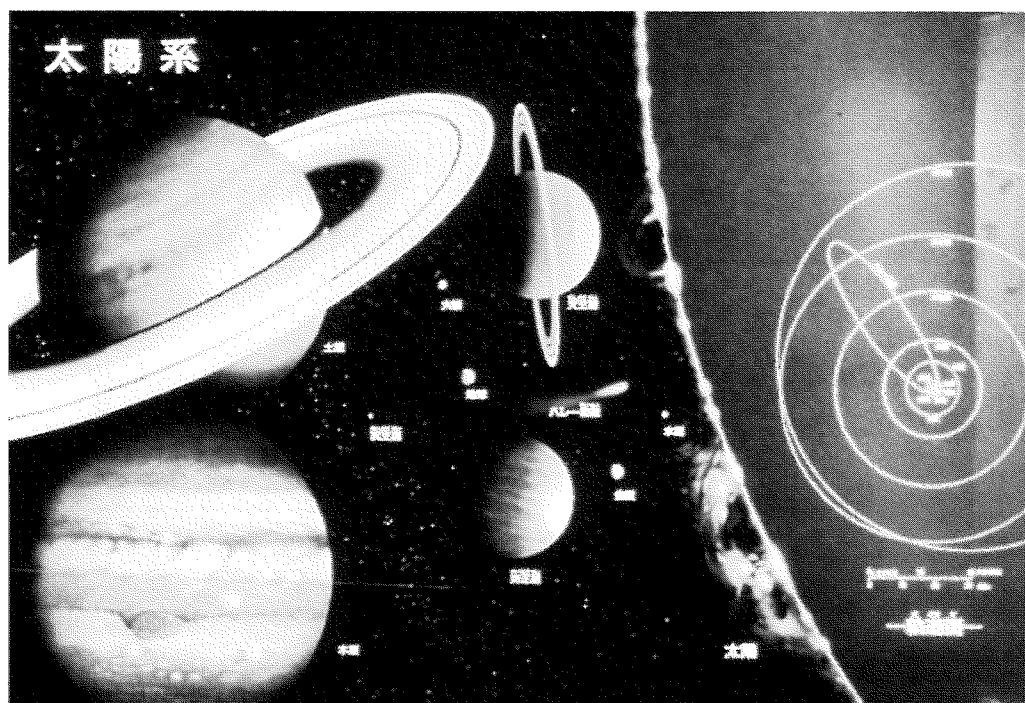
発掘調査の成果を、写真パネルや図、そして推定復元模型（縮尺 1/20）などで紹介しています。

7 ページで紹介している鎗尻金具は、保存処理中のため展示していません。

身近な宇宙の大きさを

実感しよう！

～太陽系「100億分の1」計画～



天文展示コーナー「太陽系と惑星の大きさくらべ」より

太陽系を縮めると……

私たちに一番なじみ深い天体は？と問われれば、多くの人が「月」と答えるでしょう。月は太古から人々の関心を集め、現代の日本でも「お月見」などで親しまれていますが、月に関する具体的な数値は意外と知られていません。その直径は地球の約4分の1で、地球との平均距離は約38万kmあります。この距離を実感することは難しいので、視点を変えて「地球と月の間には地球が何個入るのか？」と考えてみましょう。今、みなさんの頭の中には、どんな数が思い浮かんだでしょうか…。3個？それとも10個？実は地球と月の間には地球が約30個も入ります。きっと、みなさんが想像していたよりも月は遠かったのではないのでしょうか。月までの距離は光のスピード（秒速約30万km）でさえも約1.3秒かかるほどの遠さ（つまり、私たちが見ているのは1.3秒前の「月」）があるのです。このように、身近な月でさえ宇宙空間の広さを改めて教えてくれます。ここでは、さらに視野を広げ、太陽系の大きさを考え

てみましょう。

直径140万kmの太陽の周りを回る9つの惑星は、それぞれどれくらい太陽から離れているのでしょうか？太陽系を小さく縮めることで、そのスケールの大きさを理解してみましょう。分かりやすくするために縮尺を100億分の1とすれば、太陽の直径は140mmとなります。この縮尺で各惑星の大きさや、太陽からの平均距離を換算すると右下表のとおりです（この場合、月の直径は0.35mmで1.3mmの地球から3.8cm離れたところに位置しています。また、太陽に一番近い恒星、ケンタウルス座α星のシリウスは太陽から約4,000kmも離れていることになります）。

入りきらない太陽系

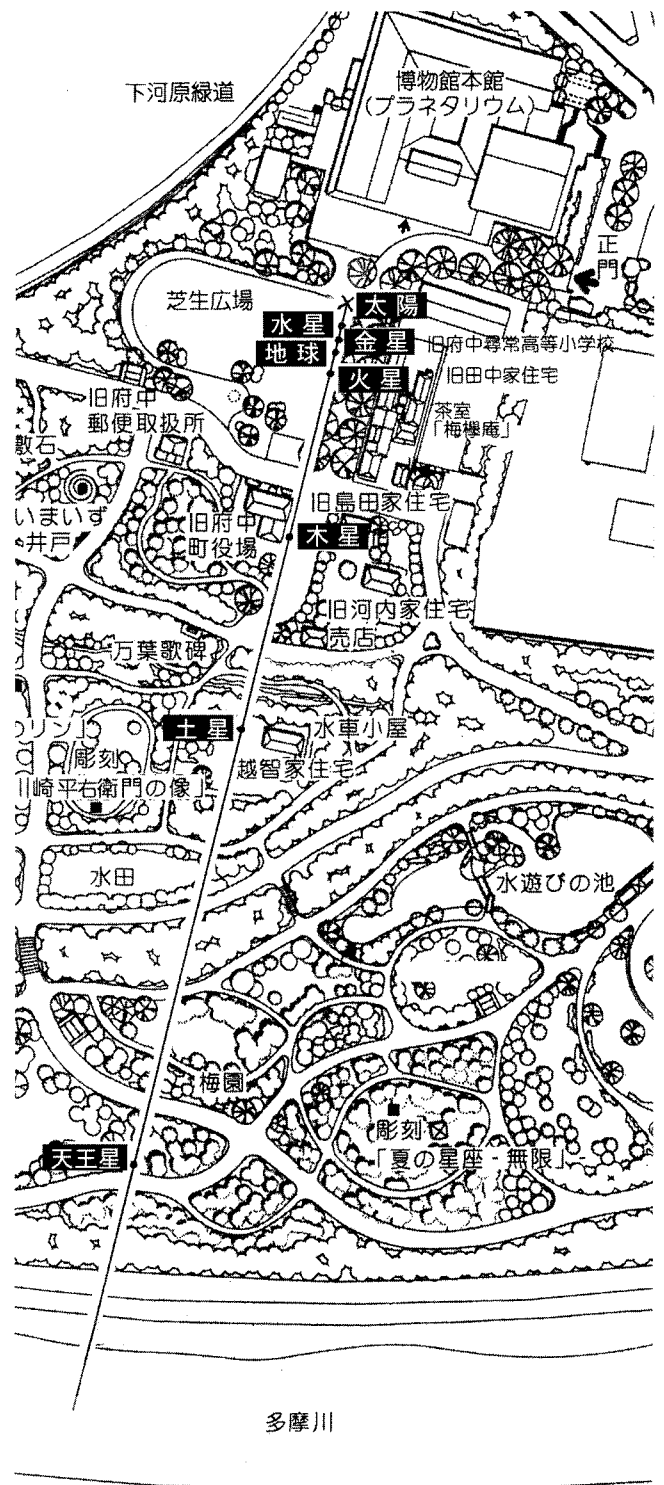
当館ではプラネタリウムの入口に天文展示コーナーがあり、そこには惑星の大きさを比べるための縮尺パネル（冒頭の写真）を展示していますが、これだけでは太陽系の大きさを理解することはできません。惑星

間の距離を展示物として表現できれば、太陽系の大きさについての理解を促し天文普及にも役立ちますが、本館内の展示スペースでは広さに限りがあるため実現させることはとても難しいのです。そこで、約 14 ha ある当館の敷地を有効に利用した屋外展示ができればと、当館のシンボルである「けやき通り」の北の端に 100 億分の 1 の太陽を置いたとき、各惑星の位置を地図に当てはめてみると…。

右図のように、この縮尺では全ての惑星が敷地に入らないほど、太陽系は大きいことが分かります。冥王星までが敷地内に収まるような縮尺にすると、今度は各惑星が小さくなりすぎて展示としての効果が得られなくなってしまいます。このことから、当館で太陽系の展示を制作する場合は天王星までですが、園内を散策がてらオリエンテーリングするつもりで各惑星を探しながら自分で歩くことによって、太陽系の大きさを実感してもらえるのではと期待できます(ちなみに、大人が自分の胸の前で両手のそれぞれの指先をつけて球をつくると、その直径は約 140 mm となります。この太陽が自分の家にあった場合、地球やその他の惑星が近所のどこに位置するのかを友達同士や家族のみんなで考えてみるのも楽しいでしょう)。

太陽系の大きさを正しく理解するために…

博物館やプラネタリウムなどにおける天文展示は、古い星図や天球儀、観測記録、望遠鏡、ロケットや人工衛星のレプリカ、隕石などが多く見受けられます。本物の星には手が届かず、届いたとしても実物が展示できない分、宇宙という空間をどのように表現すれば一般の人に理解してもらえるかが展示物の工夫のしどころです。今年の 9 月に新聞などで報道されたとおり、あるアンケートの結果を見る限り「天文現象に対する小学生の知識や理解は危機的状況にある」と言えます。今まで述べてきた当館の天文屋外展示について具体的な計画はしていませんが、東京都三鷹市にある国立天文台や長野県の臼田宇宙空間観測所にある太陽系の縮尺展示を参考にして、正しい天文知識をもつ人々を育成するためにも近い将来に実現できればと思っています。



100 億分の 1 の太陽系を博物館に重ね合わせると…

100 億分の 1 に縮めた太陽系の大きさ

	太陽	水星	金星	地球	火星	木星	土星	天王星	海王星	冥王星
直径 (mm)	140	0.5	1.2	1.3	0.7	14.3	12.1	5.1	4.9	0.2
太陽からの距離 (m)		6	11	15	23	78	143	288	450	592

プラネタリウム冬番組のご案内 「夢枕 獏原作～羊の宇宙～」 投影期間：2005年3月13日まで

民具発見

佐藤 智 敬

第七回 再発見のための準備 ～収蔵庫～

博物館で「民俗資料（民具）」と分類されるものは、質量ともに膨大です。所蔵・使用していた場所からその価値を発見され、博物館に来るモノは非常に多く、そのごく一部が常設展示室や復原建築物などに陳列・展示されているにすぎません。それ以外の大多数の資料は収蔵庫に入り、研究・展示の機会を待っています。なかなかお客さんの目に入る機会はありませんが、民俗資料をながめるのに一番面白いのは収蔵庫内を探検することだと密かに思っています。様々な分野の資料があふれんばかりに並んでいるからです。では、単なる収納場所が発見とどのような関係があるのでしょうか。今回は資料の価値を発見するための環境として、収蔵庫が持っている役割について考えてみましょう。

博物館に来ることになった道具類は、洗浄、ホコリ払い、虫干しなどをした後、「農業」「年中行事」「社会生活」「諸職」「衣服」「食事」「住居」などの項目に分類し、調査カードを作成し、収納していきます。実は現地で調査するよりも、整理、収納のほうがはるかに地味で時間のかかる作業です。それゆえ、寄贈資料が多数の場合ボランティア資料整理班や博物館実習生等にお手伝いいただき、収蔵、整理を行うこともあります。その過程では「なんだいこりゃ?」「こんなことのためにつけた道具だよ」「ヘー」「わかんないから聞いてみよう」「うちのいなかはこのなかつたなあ…」といった会話がなされ、思いついた話に花が咲き、お互いの勉強の機会にもなります。

展示の企画を考える際、当館にどのような資料があるかを知るために、整理された資料台帳をながめることも必要ですが、収蔵庫内を一巡しイメージをふくらませて、どのようなことができるかを考えたり、資料の特徴を見極めるために、収蔵資料をながめることもしばしばです。これまで、博物館ボランティアの皆さんが企画した「消防のむかし」展「暖かい道具」展、歳時記展などは収蔵庫内の資料と資料台帳を皆でながめることによって完成したのです。

収蔵庫にどのような配置でいかに効率よく資料を並べていくのか?といえ、ほとんどパズルのようなものです。限られた広さの内部にできるだけ安全に、なおかつ数多く収納するために、日々苦勞しています。

なぜそれほどにたくさん保管する必要があるのでしょうか?似たようなものを複数集めて収蔵しておく意味は?それは展示品の代用品のみならず、思い出や由来を見て民具を発見することとともに、数をそろえ

てから改めて発見されることがあるに違いない、と考えているからです。つまり、その道具の思い出や伝承だけでは分からないことが、比べてみることで分かるかもしれないのです。

例えば脱穀道具の千歯こきはその歯の数や形状、記されていることなど、一つの地域内でも多彩な種類のあることが分かります。収蔵庫1階には50近くの千歯こきが収蔵されています。それらは一点一点が個性的で、いつ新調し、誰が補修を加えた、ということが分かるものから、歯の本数、反り具合、部品の太さなどの同じ道具であるにもかかわらず、その姿が多様であることを浮き彫りにしてくれます。

民具を「いかにこれらの資料が使用され、伝承されてきたか」という視点とともに、「どのような形状がどの地域でどのように分布していたか、地域的特徴はあるか」といった視点でながめる場合、個人や一集団を越えた広域にわたる比較が必要になってきます。府中市内にとどまらず全国各地の資料と比較する必要も出てくるかもしれません。さらに、まだ実際に使用できる

資料は博物館の各所で再現、実演、使用体験をすることもあり、複数個あることが望ましいのです。

このように発見の糸口は現地調査時だけでなく整理、収蔵、展示のあとにもたくさんあるのです。もちろん収蔵庫は無尽蔵に空いているわけではありませんから、受入前にその必要があるかを判断することも必要です。とはいえ、それを続けても毎年数件とはいえ寄贈資料が増えていけば、いずれ収蔵庫はパンクしてしまうかもしれません。その問題をいかに解決するかという点には、実はまだ明確な答えは出せていません。



収蔵庫内部 どの棚もぎっしりと資料がつまっています。



ボランティア資料整理班による整理風景。このときはお椀の箱とランプを整理、登録しました（2004年9月）。

本年11月、ボランティア資料整理班として活躍されてきた小澤文雄さん（下写真左）が逝去されました。今までありがとうございました。御冥福をお祈りいたします。

最近の発掘調査

上円下方墳から

大刀金具が出土

宮西町一丁目 府中市遺跡調査会 紺野英二



出土した鞘尻金具のX線写真
(X線写真のため表裏の文様が重なって写っています)

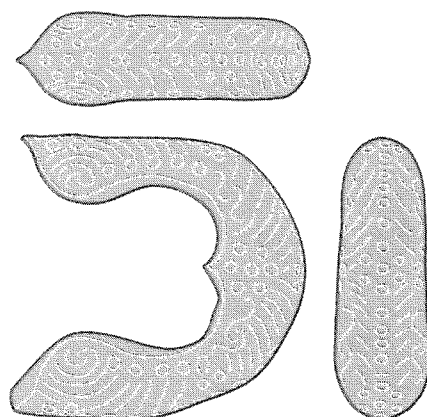
西府町で全国でもたいへん稀少な上円下方墳が見つかったことは、本誌 67 号や新聞などで、すでにご存じの方も多いと思います。今回は、この古墳の石室から見つかった大刀金具について紹介します。

この大刀金具は、7 世紀後半代のもので、大刀を収める鞘の先端に付いていた鉄製の金具です。この金具には、当時としては非常に珍しい、銀象嵌が施されていました。象嵌とは、鉄などの金属に鑿などの工具で文様を彫り、その彫った痕に沿って金や銀をうめ込む技法のことで、中国大陆や朝鮮半島から伝わった技術といえます。出土した鞘尻金具は、この銀象嵌によって、7 つの星（丸）からなる「七曜文」を 7 か所に配置し、その間を渦巻き状や S 字状の文様で埋めたものです。「七曜文」は近年「富本銭」に用いられていることが知られていますが、今回見つかった文様は国内に類例のないものです。本来、柄頭などにも同様の銀象嵌が施されていたはずで、熊野神社古墳の被葬者は、装飾豊かな豪華な大刀を持っていたことになります。

古墳時代の大刀には、柄頭が輪のようになっている環頭大刀、丸くなっている円頭大刀など、柄頭の形によって大きく分類できますが、出土した鞘尻金具は、柄頭の形が四角い方頭大刀と呼ばれる種類の部品と考えられます。方頭大刀は、古墳時代終末期のから奈良時代以降まで使用されたもので、その鞘尻金具には、内側がハートの形をした心葉形、ソケットのような筒状、覆い被せた覆輪状の 3 種類があります。今回出土したのは、このなかでも古いと考えられている心葉形のものでした。

ところで古墳時代終末期のこうした装飾付きの大刀は、中央政権の中枢から地方の有力者に下賜されたものと考えられています。熊野神社古墳の被葬者は、そうした人物の一人であったと考えてよいでしょう。この古墳の被葬者の身分の高さを物語る貴重な資料といえます。

なお、鞘尻金具は錆で覆われていて、銀象嵌の文様を見ることはできません。現在、防錆処理とともに、錆を除去する作業をおこなっている途中です。完了すると、鮮やかな文様が現れることでしょう。



推定模式図

たも RIVER WARS

⑦ SOS 玉川上水

中村武史

「な、何だ〜！」タウ工の絶叫に続き、セイコの悲鳴も溪谷に轟き渡る。「キャ〜ッ！」…右サイドから迫った黒い影の正体がわかるまでにそう

時間はかからなかったが、身を置く状況が状況だけに、このあたりでは日常風景に違いないことも4人にとっては特異な物体の襲撃に思えたのだろう…「いやあ〜、珍しいワルータね中学生がい？危ないぞ！子供がそんな不安定な乗り物で川下りなんてさ」平行して走るイカダに似た物体から一人の年配者が発した声に4人が正気を取り戻すと、それは一艘のカヌーであった。ここ御岳溪谷の激流はカヌー競技者にとっては大変魅力的な練習場だったのである。カヌーだけではない、四季折々の自然景観に加え、釣り、キャンプなどアウトドアのレジャースポットとして首都圏から大勢の人が訪れ川や森と触れ合うのだ。観光地整備の一環として昭和20年以降桜の植林も行われ、春になると川の縁はピンク色に彩られて花見客も多い…「君たち上流から下って来たのか？何かこの上で撒き散らしたりしなかっただろうな？」いきなりわけのわからない質問に一同答える間もなく、「いやね、下って来る途中の水面が一部黒いインクみたいなもので染まっていたのさ。何かはわからんが、川を汚すのはけしからんで聞いているんだけどね」

さらにカヌーの男は一方的に続ける。「まあいいや、とにかく気をつけてな。いいかげんにして早くお家に帰りなさいよ」さすがに手馴れたものでカヌーは見る見るうちに遠ざかってしまった。あつけに取られる一同のイカダがさらに下って行くと、前方の水面に巨大な黒い円…「これだ！あのおじさんが上流で見たのは」久しぶりにエノキンの大声だ。それは青い水が暗黒の雲に支配されたかのごとく毒々しい印象を与えた。「これが2か所目？誰が何のために…」タウ工の発した言葉に即座にハニーが反応した。「もしがして…暗示…ねえ、あのサルたちじゃないがしら。源流神は羽村の堰に注意しろって…エノキンは玉川上水が危ないって思うのよね…だったら…」ハッとした表情でエノキンは、「まさか！ヤツら毒物を流そうとしているんじゃないか」セイコは半分泣きべそ顔で「ワッソ〜、そんなの犯罪じゃないか〜」…果たして彼らの推測は見事に的中していたのである。

現在の玉川上水は、羽村から福生・昭島・立川・小平・小金井・武蔵野・西東京・三鷹・杉並・世田谷・渋谷を通り新宿の四谷大木戸に至る総距離約43kmの流れである。羽村取水堰から小平監視所の間では、現役導水路としての活躍が続けられている。羽村堰から取り込まれた毎秒約8トンの多摩川の水は、

小平監視所から分岐する導水路を経て東村山浄水場へと運ばれる。小平から下流では、1965年の淀橋浄水場の廃止以来流れが途絶えていたが、1986年の清流復活事業により再開の運びとなった。杉並から先は暗渠になっているため、羽村堰から杉並の浅間橋までの31km以上水沿道が整備されている。ここには武蔵野の雑木林や桜並木が残され、四季折々の自然景観を味わうことの出来る格好の散策路として集まる人も多い。従ってエノキンたちが推測するように、仮に毒物が羽村取水口から投入されたならば、一部の行く先は浄水場とは言え、汚染水が延々と流れる極めて危険な事態を招くことになるのだ。一行の目前にはすでに羽村の取水堰が迫っていた。

「おい！いたぞ。ボスザルだ。野郎、やっぱり何か投げ入れようとしてやがる」いかにも分水の岐点で背中を丸めるように水面を覗き込んでいるが、手には小瓶を持っているよう

だった。すでに流してしまっただろうが、黒インクは確認できない。「待てこの野郎、何てことするんだ！」タウ工が怒りの絶叫でボスザルの方向にイカダを向け漕ぎ出した。何度見ても異常にテキカイ！山のサルとは思えない…イカダを降りた全員が堰の通路を全力で駆けける。振り向くでもなく大ザルはサーッと多摩川本流に向かって逃げ足早く去ってしまった。「しまった！遅かったか」タウ工が悔しそうに大声を出す。4人はすぐさまサルのいた位置まで歩み寄って下方を流れる玉川上水



玉川上水
佐藤秀明『多摩川』（1993年 山と溪谷社）より

のスタート地点に注目したのだが…「あれえ、ねえ、黒いインクで染まってないよ全然」セイコが怪訝そうに呟くと、さすがエノキが答える。「本当だ、ヤツら俺たちに見つかった計画を断念したのかもな」「それにしても逃げ足が速い、一体何処に消え…」タウ工が言い終わらないうちに下方から「お〜い君たち、そこで何してるんだい？危ないから降りてきなさい」と叫ぶ作業服の男が見えた。

「私は多摩川研究グループのメンバーで、丁度このすぐ下流の永田地区でカワラノギクの保全管理をしている者なんですけど、君たちは？」4人の前に現れた50代くらいに見えるその男は、カワラノギクが河原の固有種であること、それが今絶滅の危機にある故、保全策を施していること、そして今日その場所が何者かによって荒らされたため周辺をパトロールしていた矢先に4人と遭遇したことなどを説明してくれた。対して4人は事の経緯を説明しようにもあまりに突飛な内容なので大人には信じてもらえないのではないかという懸念が先立ち、エノキンがお茶を濁した言い訳を述べるに止まった。その間、ひたすら男を見つめながら浮かべるハニーの不思議そうな表情…「この人、前にどこかで見たような気がするんだけどなあ」 つづく